

Eureka VII

六年制通信 No.5 令和2年6月5日(金)号

リングエルマン効果

学校では(というか教師の間では)、昔から二つのことが言われています。一つは「大切なことは一人の口から話さないといけない」ということ。もう一つは「集団に対して話しても誰も真剣に聞いていない、同じ話でも個別に呼んで話せばよく聞く」ということ。前者はいわゆる伝言ゲームのように、誰かを介入させるとメッセージが正しく伝わらないという意味です。むしろ大きな誤解を生むこともあるわけです。君たちの場合は特に「誰が話しているか」という要素が大きい年齢ですから、話し手によって聞き手の真剣さが変わってしまうことがあります。後者は、例えば全校集会などで「みんなに」話をすると「私に話しているのではない」と取ってしまうということです。朝礼なんか、きっとそうなんでしょうね…。

個人の時の全力と集団になったときに出す個人の全力は違うらしい。集団になると個人は全力を出しているつもりでも、何かしら手を抜くらしいのです。心理学でいうところのリングエルマン効果ですね。リングエルマンは綱引きで検証しています。面白いので紹介しましょう。1対1で綱を引きあった時の全力を100%とします。これが2対2になると筋力の93%しか出していないのだそうです。全力で引いているつもりでもです。3対3だと85%、そして8対8になると全力の半分以上、49%しか出していない。こういうのを心理学では「社会的な手抜き」(英語で言うと **Social Loafing** でしょうか)と言います。自分がやらなくても誰かがやるだろうと、心のどこかで思ってしまうのでしょうか。こういう現象は私たちの生活のいたるところであるように思います。集団になると個人の力が弱まる現象がね。探してみると面白いですよ。

集会で「みんなに」話しても「全力で」聞いてくれないというのもリングエルマン効果でしょうかね。実は私はこの通信で、ときどき「君たち」を避けて「君は」と書くことがあります。気づいていたでしょうか。これ、「自分に話しかけられていると思わせる」作戦です。リングエルマン効果はビジネスにも活用されています。いわゆるターゲットティングですね。「みんなに」売ろうとするのではなく「限定する」ことで商品に興味を持ってもらおうとする取り組みは至る所で目にします。「50才からの英会話」とか「独り暮らしの正しい食事」など、これは他ならぬあなたに向けて発信しているのですよという宣伝の仕方は多いですよ。

ただ、私の経験から言えば、人の話を聞くという点では個別であっても集団の場面であっても圧倒的に「聞き手次第」だと言えます。これは断言できます。ですから集団の場において、君たちが、いや君が、いかに個人として聞くことができるかは君次

第ということ。いつか朝礼があるでしょう。うっかりリンゲルマン効果を発揮していないかを検証してみるといいと思います。君の力でリンゲルマン効果を封じることが出来るはず。

君たちは忘れていませんよね。毎朝の検温。学校へ来たら教室に入る前に手洗いをする。昼食時は向かい合って座らない。大声で話さない。体育時の更衣はなるべく密集を避けつつ時短で行う。飛沫感染・接触感染の意味を理解できていますか。共有のもの（ドアノブなども含めて）の消毒。マスクの着用。まさか手をつないで廊下を歩いたりしていませんか。これは放課後でも全く同じです。学校外で密集し、マスクを外して話し込んでいるなどは社会的に齟齬を買う行為です。

その他、コロナ禍の前に戻ったかのような距離の取り方はいけません。みんなで新しい動きを構築しましょう。今日は **Educated Action** が取れていたか、検証しながら生活して下さい。学校生活において、こうしたほうがよいという提案が君たちからあってほしいと思います。また、ここはどうしても3密が避けられないという、私たち教職員の盲点があるなら、それを教えてください。

大げさだと思いますか。三重県は一か月以上感染者が出ていないのに。しかし北九州市は23日間ゼロが続いた後、突如第2波が始まりましたね。第2波が来るとするのは、スペイン風邪などこれまでの感染症から十分に予想されることです。もちろん来ないかもしれませんが。ひょっとしたら今月中にも来るかもしれません。だったら、来ると思ってそれに備えた、あるいは来ても自分たちは感染しない新しい生活をする、少なくともそうしようとするのが教育を受けた者の行動です。今は決してふざけていい場面ではありません。そして、やがて、あの時は大げさだったと笑えるのならそれでいいではないですか。ここで今一度注意喚起をしておきます。

今週のおすすめ

・ 雫井脩介 『つばさものがたり』 (角川文庫)

雫井さんの作品は、ドラマにもなった『火の粉』しか読んでいませんでした。これは明らかにロバート・デ・ニーロ主演の映画「ケープ・フィアー」からヒントを得ていますね。どちらもサスペンスとして成功していると思います。

『つばさものがたり』のテーマはサスペンスとは無縁の「家族愛とファンタジーの融合」といったところでしょうか。主人公はパティシエ。彼女は病に侵されながら自分の店を持つと奮闘する。兄の子ども、彼女の甥っ子が「ここに店を出しても流行らない」と予言をするのだが…。

甥っ子にしか見えない子どもの天使レイ。これがまだ半人前で、これから天使になれるか妖精として生きるかの試験を受けるのですね。主人公も兄も、もちろん最初は信じていないのだけど、結局その試験の応援に行くことになるわけ。私もつい応援しながら読んでいました。こういうファンタジーが一方でありながら、主人公の悪戦苦闘と病気の進行、彼女を支える家族をはじめ周囲の人々を嫌味なく描いています。

ちなみにレイは人のオーラを食べるのですが、おいしいオーラとそうでないのがあるらしい。こういう設定、私は面白く思いました。

BGMは フランク・シナトラ の *The Impossible Dream* でした…。